
起動したての 안드로이드 ver.2

葉藻阪 松園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起動したてのアンドロイドver.2

【Nコード】

N3067V

【作者名】

葉藻阪 松園

【あらすじ】

【内容】

現代日本。実は未来から来た超能力を持つアンドロイド達に裏から支配されていた???

そんな中、同居することになった3人の日常を描いた話。3人の視点が切り替わります。

【登場人物1】

轟連治：唯我独尊な姉に振り回される高校生の少年。超能力が効かないらしい。

【登場人物2】

黒田久美：自分は本当に人間なのか？と疑問に感じていたトラウマ持ちの中学生の少女。

怪しい男にアンドロイドであることを告げられ、超能力を与えられる。

【登場人物3】

轟春香：連治を溺愛するOLの姉。

【あらすじ】

アンドロイドの未来と自分の幸せをつかむため、久美が超能力を駆使して轟姉弟と仲よくなれるように頑張るうちにトラウマを乗り越え人間に近づいていく…。そんな話です。

【注意】

シリアスな場面もありますが、感動ラブコメ目指してます。

冒険、バトル、ファンタジー要素は少なめです。

”起動したてのアンドロイドver.1”もありますが、ver.2は2巻という意味ではないので、どちらから読んでも大丈夫です。ただし、こちらは不定期更新です。

久美：あからさまに胡散臭い男と話す（前書き）

投稿開始。

よろしく。

久美：あからさまに胡散臭い男と話す

振り下ろされる母の白い手。

投げつけられる暴言。

何度も何度も。

彼女は逃げても執拗に追ってくる。

避けるのを諦める。

彼女が満足するまで待つ。彼女が自分に興味をなくすまで。

**

キュウリ、ナス、かぼちゃ。色とりどりの野菜。

気がつくと、野菜売り場の前。

また3年以上前の記憶がよみがえっていた。

なんで母はあんなに私のことを嫌っていたのだろう。もう、そんなことも考えることがなくなった。母のいなくなった今では。

なぜだか分からないが、特に気にもならない。

最近では、楽しい、悲しいと感ずることもない。もしかしたら、彼女には分かつていたのかもしれない。私が薄情な存在だということを、人間性を持っていないということを。

ふと視線を移すつと、ガラスに反射した自分の顔。黒田久美の自然な顔。

長髪 of 黒髪で真っ白な肌。よくお人形さんのようだと言われる。しかし、それはほめてるわけではない。無表情で作り物のような顔に皮肉をいつているだけだ。

孤児院の同室の少女によると、顔の部品一つ一つは整っているが、久美の顔はかわいいというよりも奇妙と言う方がしっくりくるらしい。表情に変化のないためだろうとのこと。

タイムセールのアナウンスで思考が中断される。

とりあえず、今晚の食材を買わなければ。今年から任された孤児院の料理当番。サラダ用に赤いトマトのパックを手に取り、籠の中の緑のきゅうりの隣にきれいに並べて入れる。車いすに乗った私の膝の上の籠の中に。

昔は大変だったが今は慣れた。車いすにも。左足の義足にも。中学生も今年で最後、体が大きくなったためだろうか。

夏はナスが食べたいわ。ふと、今朝の院長の言葉を思い出し、青紫のナスを手取る。その時、後ろから声かけられた。

「こんにちは、御嬢さん」

聞いたことない声。振り返ると、夏にも拘わらず黒ずくめのスーツ。昼どらで見た悪役顔の笑み。おそらくかつこいい部類に入るのだろうが、不自然な笑顔ですべて台無しだった。

「あなたは、自分がアンドロイドではないかと疑問に思ったことはありませんか？」

それは、いつも御嬢さん 黒田久美 が疑問に思っていたことだったので驚いてしまった。

私の声はロボットのように機械的で、動作も不自然。何より味も匂いも感じることもできない。

しかも、感情に乏しく、最近では喜びも悲しみもほとんど感じない。だから、私はロボットなのかもしれないと、そう考えることも度々あった。

「最初はみんなあなたを異常に感じるでしょうが、いつの間にかその違和感を不自然に忘れてしまっている。違いますか？」

確かに男の言うとおり。

初対面の人たちは久美に対して必ず疑問に感じるみたいだ。でも、しばらくするとその違和感がさも当然のことかのように接するようになる。とても不可解なことに。

「しかし、そんな精密なアンドロイドが存在するはずはない」

それも、確かにその通り。

前に一度、孤児院の院長に自分はロボットではないかと相談したら、現代にそんな技術はないと苦笑いされてしまった。

「それらの疑問にお答えいたしましょう。
もし、続きを知りたいのであれば、この通信機をお受け取りください。
い。」

ボスが直接あなたにお話がしたいそうです。」

名もない劇団の大根役者のような大げさな動きの男が、ポケットからゆっくり黒色の物体を取り出す。おそらく通信機だろう。そして、こちらに向かつてそれを差し出してきた。

普段なら絶対受け取らない。余りに胡散臭い。

最初は躊躇したのだけれど、なぜか受け取ってしまった。何かあれば捨てればいいと、なぜかそう判断してしまった。

「では、しばらくしたら、ボスから連絡が行くと思いますので」

男の不気味な笑み。受け取ったことを少し後悔する。

大股で自分の演技に満足したかのように去っていく男。男の姿が見えなくなるまで見送ることとした。

ここで再びタイムセールの放送。

夕食の準備があるのを思い出す。早く買い物の終わらせて孤児院に戻らなければと、車いすの車輪に手を伸ばす。色彩豊かな野菜売り場。とりあえずここから離れることにした。

男のことは、時間のある時考えよう。

院長はナスのお浸しが気に入ったらしい。また今度お願いとリクエストを頂いた。

夕食終わって片づけ中、カチャカチャと食器が音を立てる。

明日の献立を考えると、いきなりポケットが震えだす。買い出し中にもらった通信機の入ったポケットが。

お皿を取り合えず放っておいて、私は急いでトイレに駆け込むことにした。

「始めましての方がいいかな、製造番号：DQ1987126。私は、シードと呼ばれているものだ」

シード：種？ 明らかに偽名。明らかに怪しい。

男の声は40代に聞こえる。でも、無機質、不自然で人間味を全く感じない。

あまりに不気味な声で、信用できるかどうか分からない。

ただ気になっているのも事実だから、とりあえず話だけは聞くことにした。

シードの話はゆっくり、ゆったり。ときどき、何かを嚙っている音。おそらく紅茶でも飲んでる。

ようやく終わったシードの話をまとめてみる。

どうもこの世界は、未来からタイムトラベルしてきたアンドロイドが人間達に気づかれず、支配しているとのことらしい。

その上、人間に気づかれるたびに、何度もタイムトラベルを繰り返しているとのこと。

何度も何度も。

人間達が同じような歴史歩むように密かにコントロールしていると告げてきた。

「人間にばれたとき人間とタイムトラベルを使った争いが起きなかつたんですか？」

疑問に思ったので質問。すぐに答えが帰ったきた。

「タイムトラベルは生命を運ぶことができないので人間と争いが起こっても負けることはない」

なるほど。それでは人間はアンドロイドに絶対勝てない。

もしかすると私もタイムトラベルできるかも。その考えは、すぐ否定される。タイムトラベルの装置を積んだアンドロイドは現在シートだけらしい。タイムトラベル時は、すべてのアンドロイドからシートに記憶を集める。実質的には、アンドロイドはすべて生き残るというのがシードの主張。

壊れてもバックアップ可能。だから私も不死との結論らしい。

「私は、何の目的のために今回作られたのでしょうか？」

もし彼の言うことを信用するなら、これが私の疑問だ。なぜ私は作られたのか。今になって接触してくる理由はなんだろうか。

「あまり慌てるな。順を追って話していこう」

シートはそう告げ、しばらくの静寂が空間を支配する。通話機越しに紅茶を啜る音。カチャリというカップを置く音。シート作られた声が通信機から再度聞こえてきた。

「そうだな。まず現在の一般的なアンドロイドについて説明しようか。

アンドロイドは、電腦中枢と呼ばれる領域で情報を処理している。その処理を電算処理という。

そして、アンドロイドは、ナノマシン細胞と呼ばれる人間の感覚器官を模したもので表面がおおわれていて、この細胞が外界からの情報を取得している。

アンドロイドの機体の中では、電腦中枢とナノマシン細胞を結び付けられていて、使い込むうちに味覚・嗅覚・触覚・視覚などが模倣できるようになる。

しかも、骨格の自動縮尺変更と組み合わせで、成長や老化現象も再現できるようになっている。

今のところお前は、視覚と聴覚は問題ないようだな」

「はい、触覚も大丈夫です。ただ、味覚と嗅覚はまだ…」

味と匂いが感じないのは、私の機体に不具合があるから？

そう考えていると、少しずつ改善していくと返答があった。

匂いと味が改善すれば、お菓子作りが楽しめるはず。そうすれば、感情ももっと感じるようになるかも。

私に思考を放っておいて、シードは勝手に話を続ける。

「しかし人間に似てくるといっただけで完璧ではなく、当然不自然に感じる人間も出てくる。

それを解消するのが、常にアンドロイドの機体が発信している認識障害電波だ。

その電波には、人間の脳に直接働きかけ、不自然なことを受け入れてしまう催眠効果のあり、それによって、アンドロイドであること

を人間に気づかれずに今までは近づけていたのだが」

今までは？が気になり思わず質問。

「そう。今までは。

今回は私にとつて、15回目の2010年だ。

前回の14回目の失敗は、認識障害電波の効かない改造人間が大量に生み出されたことが原因だ。

認識障害電波は、人間の脳にある視交叉に働きかけるのだが、遺伝的にその形状が通常と異なる人間が存在し、どうも彼らには認識障害電波が効かなかったらしい。それだけならともかく、反アンドロイド組織を作りあげ、視交叉を改造した認識障害電波の効かない軍隊を秘密裏に作り上げていたのだ」

シードは一息置いた後話を続ける。

「今回は、反アンドロイド組織が発足しないように慎重に事を進めているのだが、実は4年前にその状況に進展があつてね。

人間の協力者の研究により視交叉の形状に変化があつても認識障害が効く電波が開発されたのだよ。」

人間の協力者？に次は反応。

「ああ、一部の人間には、協力してもらっている。

アンドロイドの発展には、人間の力が必要だからな。

ただし、家族にも秘密は漏らせない状況にはしているがね。

さきほど、お前に通信機を渡したゴーハも人間の協力者の一人だ」

先ほど会った変わった男は、ゴーハというらしい。彼は人間だったのか。

その割には動きがおかしかったようなと疑問に思っていると、シードは、そのまま話を続ける。

「少々、話がそれたな。」

今回の話の本題なのだが、最新版の認識障害電波、我々は認識障害電波改と呼んでいるが、その実験のために認識障害電波改を組み込んだお前を作製したのだ。

実験と言っても、特定の人間と話をして、認識障害電波改がうまく働くかどうか観察するだけだな。
やってはくれんかね？」

お願いと言うより脅迫に近い。

ただ、特に迷惑になる頼みでもない気がするから、了承することにした。

そして何よりもっと気になることを早く質問したかった。

「先ほど、認識障害電波改が4年前に開発せれたと…。」

「その通りだ。おそらく疑問に思っているのは、お前の制作された年とそれが一致しないということか？」

そうです。私には4年以上前の記憶が存在する。あまり人間的には喜ばしい記憶でないのだけれど。確かに存在はする。

それでは、4年前に開発された認識障害電波改のために私が作製されたということとつじつまが合わない。

そうですという言葉が喉から出てこず黙りこむと、シードはその疑問に答えを返してくれた。

「お前は、私が3年前に作製したのだよ。」

「3年前？」

「そう、お前が孤児院に入る直前だ。それ以前の情報は、私が植えたものだ」

「親に関する情報もでしょうか？」

久美の孤児院以前の記憶では、母親とアパートで二人きり。父親はいない。

学校にも行かせてもらえず、母親に殴りつけられる光景しか残っていない。

何度も何度も理不尽に殴られ、何度の何度も理由も分からず暴言を吐かれる光景。

今でも、その映像が電腦中枢で時々再生される。

なぜ何も悲しくないのか疑問だったが、それが解けた気がした。

植えつけられた記憶だったから…。

ただそれだけの理由。

アンドロイドだったから…。

たったそれだけの理由。

ただ新たな疑問が沸き起こる。シードは、なぜそのような情報を植えたのか。シードの答えはあっさりしていた。

「その方が好都合だったのだよ。」

いきなり11歳の子供が発生するのは不自然だから、周りとできるだけ接点のない家庭環境だったということにしておいたんだ。

希望するなら、今回の実験がうまくいったら消してやろう。

ただし、できるだけ人間に違和感を覚えさせたくないの、実験が終わるまでは我慢しておけ。

その代わり、実験後には、お前のためにアンドロイドの家族も作製し、幸せな家族の情報を上書きしておいてやる」

幸せな記憶。仲の良い家族。

アンドロイドでもそれらがあれば感情を得ることができるのか。疑問に思っただけで、とりあえずありがとございますと答えておく。

「そういえば、私はなぜ左足が義足なのでしょう。」

これはもう一つの疑問。義足である必要性。なぜ人間にばれたくないのに、あえて目立つことをするのか。

「ああそのことか。理由は二つある。

一つは、さっきと同じ理由だ。周囲の人間とあまり接触を持っていなかったことが不自然でないようにしたかったからだ。外出していなくてもあまり疑われないから。

もう一つは、違和感を当たり前にするためだ。

例えば人間がお前に対して違和感を感じたとしても、その違和感が義足になった過去のトラウマのためだと勝手に誤認してくれるだろうから。

人間は何か理由があればそれ以上別の理由を探さないことが多い」

そうですかと、とりあえず納得する。

「安心しろ。今回の実験が終わったら、完全な機体に取り換えさせてやる。

そのためにも最高の結果を期待している」

余り感情を感じないため特に義足が嫌だとは思わない。

ただ、本当のアンドロイドの家族ができたときには考えが変わるか

もしれない。

そう結論して特に断ることはやめることにする。
もう一度ありがとうございますと答えると、その返答に満足したのか、シードは、具体的な仕事の依頼をしてきた。

「こちらの準備もある程度整ったので、これからターゲットに接触してもらおうと思う」

「ターゲットですか？」

「ああ、反アンドロイド組織のリーダーの祖先だ。
名前は、轟連治。15歳の男で、戸籍上はお前より一歳上になる。
調査したところすでに通常の認識障害電波は効きにくい体質らしい」

「どうやって接触すればいいのでしょうか？」

「その点は心配するな。」

すでにゴーハがターゲットの姉の轟春香と交流を持っている。
ゴーハが、ターゲットの姉とお前が出会えるようにセッティングするだけで、向こうから接触したがるようになるだろう。

そのためにお前の容姿を4年前に死んだターゲットの双子の妹と瓜二つに作製したのだからな」

「伝え忘れていたが、ゴーハは、現在、三条四郎という名前で生活しているから、普段呼ぶときはそう呼ぶように。」

そう言えば、お前のコードネームを決めてなかったな。

よし、ムーンにしておこう。

いつまでもお前では、呼びにくいからな。

では、進展があったり、疑問に思ったことがあったら、通信機で連絡するように。

私とゴーハのアドレスは、入っているはずだ」

お前もどうかと思うが、ムーンもどうかと思う。

ただ、名前はころころ変わるらしいので、別にコードネームというものを持つのは仕方がないかもしれない。

しかし、正直ゴーハには余り会いたくない。

今ではその理由なんとなくただと分かる。

人間だけど不自然な動き。彼を見てると自分がアンドロイドであることを嫌でも思い知らされる。

普段は、シードに報告しようと思う。

私は了解しましたと答えて、真黒な通信機の通話を終わらせた。

久美：あからさまに胡散臭い男と話す（後書き）

【お知らせ】

”起動したてのアンドロイドver.1”もあり、そちらとあらずじは、ほとんど同じですが、中身は結構違いがあるので、両方読んでくれるとうれしいです。

連治：少女と出会う

「連ちゃん、今日、新しい家族が増えるからね」

相変わらず唐突な姉である。

いつも以上に上機嫌で鼻歌を歌いながら晩飯の用意をしている姉轟春香に確かに訝しさを感じていた。

いたのだが、そうくるとは思わなかった。

日曜日だからだろうかと勝手に納得していたのだが。

また猫でも拾ってきたのだろうか。

それから、俺の名前は連治だ。いい加減にその呼び方はやめて欲しい。

相変わらずニヤけた顔をこちらに向けている姉に、ああそうと適当に答えて、もう無視することにする。

とりあえず、釣りの道具を手入れを続けよう。

いつも食事に使うテーブルの上。少し釣道具を広げすぎて、糸が絡まっていた。

まずは絡まった糸を解かないと。

「4時ごろ来るって言っていたから、もうすぐよ」

話はまだ続いていたらしい。

4時に来るということは宅配だろうか。姉貴にしては珍しくペットショップで買ったようだ。

最近姉の仕事が忙しそうだったし癒し系は必要だよなと、今考えると完全に的外れとも言い切れない予測が頭に浮かんでいると、玄関から到着のベルが鳴った。

「あら来たわね。ちょっと私、揚げ物中で手が離せないから、連ちやん出てて」

「ああ、分かった」

今日は好きなかぼちゃの天ぷらみたいだな。と考えながら、了承する。

少しみしみし音のする廊下を歩いて、玄関までたどり着く。

スリッパを突っ掛け、年季の入ったドアノブを回し、木目の目立つ扉をあけようとしたとき、途中でガツンと何かに当たった音がして、最後まであけることができなかった。

「すいません」

女の子の声？誰だろう？

キュッキュツと台車か何かの後退する音が聞こえる。

姉の知り合いだろうか。

車輪の音が消えたから、扉を開けてもおそらくもう大丈夫だろう。

「いえ、こちらこそすいません」

ゆっくり扉を開けながら謝ると、車いすに乗った凜音の姿をした人形が眼に入ってきた。

人形の頭がピクリと揺れる。どうやら人間だったらしい。

だが、似ている。あまりにも似ている。3年前に死んでしまった双子の妹の凜音に。

一体彼女は何者なのか？

かける言葉を失っていると、いつの間に来たのか、後ろから聞きなれた姉の声がして現実に引き戻された。

「ようこそ、久美ちゃん。これから、よろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

「ほら連ちゃんも」

姉に促され、少し落ち着きを取り戻し、黒髪の少女にあいさつする。

「よろしく」

その後、すぐに姉に説明を求めると、今日から家族になることを告げられた。

「びつくりしたでしょ。連ちゃんの驚く顔が見たくて、黙ってたの。ふふふ。作戦第一弾成功だわ」

第一弾？

これ以上何をするつもりなんだ？

姉の不気味な更なるいたずら宣言を聞きいて思わずため息をついてしまった。

「やはり、御迷惑ですか」

姉に聞こえるようにあえて大きめにしたから当然なのだが、どうもため息が少女にも聞こえていたようだ。

出会っていきなりの溜息で不安にさせてしまったのだろう。

彼女はか細い声で無表情にそう呟きながらうつむいた

慌てて否定しようとする、姉がはだしで玄関を駆け抜け、いきなり少女に頼ずりを始めた。

しかも、悲しむ久美ちゃんもかわいーとか何とか叫びながら。相変わらず訳が分からない。

とりあえず少し頭痛を感じながら、あのため息はこの馬鹿姉に対してのものだと誤解を解いて、改めてよろしくと返事をした。

「久美ちゃんの荷物は、夕方届くのね？」

この家古くて、バリアフリーじゃないから、不満があったらいつでも言ってね。
すぐ直すから」

バリアフリーか。

とりあえず、玄関にスロープを付けないと段差があるから車いすでは入れないな。

と考えながら、頼ずりをつずける姉を引き剥がして、車いすごと持ち上げようとする。

「大丈夫です。歩けます。車いすだけお願いできますか？」

そう言っただけで彼女が立ち上がるのをクララを応援するハイジの気持ちになって見守っていると、彼女が右足に体重をかけていることに気づく。

どうも左は、義足らしい。

思ったよりスムーズに歩く彼女にほっとしてから、車いすをたたみ左手に抱えて車いすを運びこむことにする。

横を見ると、顔の前で祈るように両手の指を組んで眼を潤ませて少女を見ている姉がいた。

何やってんだ。

天ぷらは大丈夫なのかと姉に尋ねると、あつと声を上げて走って行った。

テーブルの上に広げていた手入れ中の釣り道具をかたづけ、姉の作った料理を並べる。
所在なさげにちょこんと椅子に座った少女を含めた3人で初めての食事が開始した。

「家の中用の車いすは買っておいたから、それも夕方届くわよ。
他に必要なものは、とりあえず日曜日に買いに行くわよ」

じゃあ、さっきの車いす玄関に置いておけばよかったのでは。
姉のいきなりの新しい車いす買った発言に心の中で突っ込む。
姉と少女の会話、を聞きながら、ひとり大好物の力ボチャの天ぷらを食べていた。
会話と言っても姉が一方的に捲し立ててるだけののような気がするが、
ようやく満足したのか姉が食事を始めたので、久美とお互いの趣味
について話をすることにした。

趣味の釣りの話で熱くなったために途中から連治しか話していない
ことに気付いたが、徐々に打ち解けてきたのか、さっきは人形のよ
うだと感じた顔に表情の微妙な変化があるのが分かるようになった。

突然のこととただ驚いていたが家族になるのだし仲よくしていければとご飯を掻き込みながら考えていると、思い出したように姉が声をかけてきた。

” 久美ちゃんの部屋は、連ちゃんの部屋の隣よ。

連ちゃん後で案内してあげて。

それから部屋も片付けお願い。”

” えっ、ちょっと待てよ。

あそこは、凜音の部屋だぞ。”

姉の言葉に思わず反応してしまう。

あの部屋は凜音が死んでから、誰も使っていないかった。

定期的に掃除はしているが、今も4年前のままだ。

” 他に使っていない部屋がないのだから、いいじゃない。”

確かに姉の言う通りではある。

そうではあるのだが、何か釈然とせず、再び御飯を食べ始めたものの食事が終わるまで何を言えいいか言葉が見つからなかった。

連治：少女と出会う（後書き）

2011年 07月 29日

心表現難しい。

久美・凜音の部屋で思う（前書き）

連続投稿。

久美・凜音の部屋で思う

ターゲットが食事の途中からずっと口を閉ざしたまま。
彼の妹の部屋を私が使うことを知ってから。

これから、うまくやっていけるのだろうか。
彼の私への印象はいきなり悪い状態らしい。

夕食後に届いた車いすに乗ってキッチンを出る。
廊下の一番奥にある凜音と書かれた部屋の前までターゲットの後ろ
についていった。

これが、私がこれから過ごす部屋。

「この部屋だよ」

扉に掛ったピンクのイルカの板に凜音の文字。
ターゲットが扉を開ける。

扉の動きに合わせてイルカが揺れる。まるで、ここが彼女の部屋で
あると主張しているみたい。

「ありがとうございます」

ターゲットが開いた扉を抑えている間に、彼の脇を抜け、部屋に入る。

ピンクのベットカバーに枕元にピンクの服着たネズミのぬいぐるみ。
人間の女の子の好む部屋。それが視界に入ってくる。

ベットの横の机の前まで移動し、持ってきた茶色の鞆をその上に置くことにした。

パタンと扉の閉まる音。

振り返ると彼と眼が合う。何を話せばいいのかわからない。電腦中枢が混乱し、うつむいた。

ターゲットはそんな様子に憤慨したのか。無言で足元に散らばっていたぬいぐるみを棚の上に片付ける。

そして、すぐに、ほんとにすぐに、出て行ってしまった。

「不便だと思うなら、いつでも言うてくれ。じゃあ、お休み」

出て行く前にターゲットはそれだけ告げて去っていく。

慌ててお礼を言おうとするが、ありがとを言う前に扉が閉じられてしまっていた。

閉じた扉。二度と開かないのではないのか。誰も入ってこないのではないのか。そんな考えが電腦中枢を駆け巡る。

完全に出会いは失敗に終わる。これから信頼回復しなければならぬらしい。この問題を電算処理で解こうとしたけど答えは出てこなかった。

出なかったが孤児院にいた時に隣の部屋の少女がしていたことを思い出し、ぬいぐるみに尋ねてみたがやはり答えは返ってこないようであった。

ふと棚の上にある一つの写真が観測された。
ターゲットとその姉、そして自分によく似た少女が仲良く手をつないでる。

写真に写ったピンクの服の少女の目は、私では彼女の代わりにならないと言っているように見えた。

アンドロイドでは家族を持てないと。

一瞬電腦中枢が停止していたのに気付き、不思議に思いながら再起動する。

家族とは手を連結させるものだという情報を電腦中枢に書き込み、この任務が終わった後にシードが家族を用意してくれるという言葉を思いだす。

アンドロイドでもこんな風に笑うことができるのだろうか？

今度は、そんな疑問が電腦中枢を駆け抜けた。

写真の少女の黒い瞳と目を合わす。

突然、隣の部屋の扉が乱暴に閉じられた音。ターゲットの部屋だろう。その直後に、ベットに飛び込む音がした。

もしかすると彼は私のことを不審に感じていら立っていたのでは？
認識障害電波改が予想以上にうまく作動していない可能性があるのでは？

不審なモノが妹の部屋を使うことを嫌悪しているのでは？
そんな仮説が電腦中枢を支配する。

これは、シードに報告しなければいけない。
そう結論付け、通信機を取り出そうと鞆を開くと、部屋の扉が開いて突然黄色の服の女性が飛び込んできた。

「お風呂開いたわよー」

慌てて茶色の鞆を閉じる。

どうやら彼女はお風呂に一緒に入らないかと提案にきたらしい。そこで、いつも一人で入っていた旨を伝える。

「危なそうだったら、すぐ呼ぶのよ」

彼女は涙目の視線を向けてくる。この間、院長が初めてのお使いを見ていたときと同様の。

報告はお風呂の後にしようと判断し、洗面道具を鞆から出して、私は凜音と私の部屋から出ることにした。

連治・猿でもできる反省をする（前書き）

追加。

連治：猿でもできる反省をする

イライラする。こんな感情は久しぶりだ。

なんでこんなに不機嫌なのか分からない。それがまたイライラを加速させる。

「お風呂開いたわよ！」

ベットの上で仰向けに寝ていると、隣の部屋に馬鹿姉がそう叫んで突撃していった音が聞こえた。

何か姉が喚いているようだ。内容までは分からない。しばらくするとキュッキュツと車輪が廊下にすれる音がして隣の部屋から少女が出ていく。おそらく風呂だろう。

まずは落ち着こう。そして、考えを整理しよう。目をつぶった瞬間に突然部屋の扉が開けられ、今度はこちらの部屋に姉が飛び込んできた。

「連ちゃん、愛してるわ」

暑苦しい言葉を吐く姉が、寝ている俺の首に腕をまわして頬ずりをしてくる。

馬鹿姉を引き離そうとすると、もう照れちゃってと呟いて、意味深な瞳でこちらを凝視してきた。

なんか言いたいことあるのかと聞くと、勘違いも甚だしい答えが返

ってきた。

「ごめんね。連ちゃん。

さつき、久美ちゃんとはかり話してたから、妬いちゃったんだよね。大丈夫。私、連ちゃんのこと大好きだから」

違う。断じて違う。そんなことでイライラするわけないだろう。反論しようとする、首にまわした腕をさらに締め付けてきた。

まず引き剥がそうか。

とりあえず、実力行使することに決定し、姉が首に手を回せないように両手を伸ばして姉の両肩を押さえつける。

力では、もう姉に負けることはない。

体を離されたことに不満げに口をとがらせながらも、少女と初めて会った時のことを長々と語り始めた。

恋愛小説の主人公がお姫様に出会った場面でしか使わないような華美な言葉で装飾して。

「彼女見てると、ぎゅっとしたくなっちゃうよねー」

犯罪行為に同意を求められても困る。

しかも人の話を聞かないし。

この状態になったら満足するまで話終わらないんだよね。

「あつ、連ちゃんも、したらいいのに。めちやくちや抱き心地いいのよ」

次は、犯罪行為を俺にも推奨してきた。この姉はいつか捕まるのではないのか？

結局姉が満足するまで話を聞くしか道はなさそうだな。

「でね。絶対彼女ツンデレだと思うの」

これが姉の最終結論らしい。

姉のそこに至るまでの過程が全く分からなかった。

ただ、さっきまで感じていたイライラはいつの間にか全くなっていたことに気付いた。

ほんと馬鹿姉と話してると調子狂う。

そう感じていると、少女が風呂から上がったのだろうか、隣の扉が開く音がした。

ふっと、部屋に案内した時に無表情な彼女に一瞬浮かんだ不安げな表情が思い出される。

少しずつ後悔の念が大きくなっていくと、突然、姉の携帯に着信があった。

「あら、こんな時間に仕事の電話だわ」

そう言っただけで慌てて出て行くとする姉が、扉近くいった後にまたこちらに引き返してきた。

不審に思う間もなく、耳元でこれからは3人で頑張ろうねと囁いた後、頬にキスをしてくる。

「おし、3人で幸せになるぞー」

小学生か？

姉が勝手に大声で宣言して部屋をようやく出ていく。

また隣の家の田中さんに文句言われそうだ。話長いんだよね…。しかも途中から毎回戦国武将の話になるし。

今回の罰と思えば耐えられるかな…。

姉にこの日何回目かわからないため息をもらし、相変わらず嵐みただいと嘆くしかなかった。

久美：心をインストールする

お風呂で機体を洗浄し、部屋に戻ってきていた。

食事中のターゲットの様子をもう一度電脳中枢で再生してみる。

やはり私に対して違和感を覚えているのではないのか？

そうでなければ、あの突然の苛立ちは説明できない。

シードに報告しなければ危険かもしれない。それに、もしかすれば、何かいい解決方法が得られるかも。

茶色の鞆から黒色の通信機を取り出しシードのアドレスに発信する。今回通信に出るのに時間がかかった。忙しかったのかもしれない。アンドロイドのトップだから当たり前かな。

「待たせたな、ムーン。別の案件で、立てこんでいた」

別の案件？

「私以外にも同じような役割のアンドロイドがいるのでしょうか？」

「当然だろう。人間は、強欲でこずるいからな。次から次へと問題を起こしてくれる。それでは、今日の報告を聞こう」

そう言ってシードは要件をすぐに聞いてきた。

今日は相当忙しいのかも。手短にまとめることにする。

今日の出来事を順番に話していく。

ターゲットへの第一印象が悪く嫌われてしまったこと。

それは、久美に違和感を覚えているのが原因ではないか。認識障害電波改が機能していないから。と淡々と告げた。

しばらく沈黙が続く。その後、電子的な声でシードが一つの提案をしてきた。

「では、認識障害電波改だけでなくハート・プログラムをインストールしてみるか」

ハート・プログラム？

何のことだろう。

シードに聞き返すと、ハート・プログラムの説明が始まった。

「心を模擬的に再現したもので、状況に応じて、顔や手や足の動きといった外部形態や心拍数そして肺活量の変化などを引き起こすプログラムだ。

最初は、喜怒哀楽の四つの単純な表現しかできないが、人間を観察し、情報を蓄積することで、他の複雑な感情も再現できるようになる。つまり、人間の行動を記録し、まねる機能だと思ってもらっていい。

まあ、人間の子供も同じように感情が育っていくから、自然而然に思われないだろう」

アンドロイドでも感情を持つことができる。

意外な言葉が耳で観測。シードの話の続きを集中して聞いていく。

「人間の持つ感情はたいいてい全部取得できるぞ。

近くにいる人間に好みや感情表現が似てくから、気に入られる可能

性も高くなるだろう。

人間は、自分に共感してくれる人間に好意を抱くらしいからな」

「なぜ、今まで私の機体に搭載されていなかったのですか？」

ふとした疑問。当然の疑問が口から放出される。

「弊害があるからだ。

ハート・プログラムをインストールすると、最も影響を受けた人間の映像が頻繁に脳中枢でフラッシュバックされるために、その人間を強烈に意識してしまう。

一般的には、ハート・プログラムの暴走といわれる現象だ。まあ、一部のアンドロイドは、人間でいうところの盲目的な恋愛感情というものに酷似していることから、心酔現象とか呼ぶようだ。

過去に、ハート・プログラムの暴走で任務を失敗したアンドロイドもいた。ターゲットの人間のことしか考えられなくなったのだ。

もし、インストールするのであれば、そうならないように十分気をつける必要がある」

なるほど。それなら仕方ない。

とても危険なプログラムであるのは確かだろう。

でも、ターゲットの違和感をなくすには必要なプログラムであるのも確かなような気がする。

まずはインストールしてみたい。しばらく使って考えればいいかもしれない。

シードにプログラムのインストールする旨を告げる。そして、インストール方法を尋ねたところ一番簡単な方法とゆづのを教えてくれた。

「通信機をそのまま耳に当てているだけで構わない。

お前の機体と今使っている通信機は、無線で繋がれるから、通信機を経由してプログラムをダウンロードできる。ダウンロードしたら、自動でインストールされるから心配するな。では、プログラムを送信するぞ」

それならすぐできそうかも。

シードの指示通りに耳に通信機を当てていると、甲高い音が通信機から発せられる。

痛い。キンキンと耳が痛い。

耳鳴りがした後に電脳中枢に小さな痛みが走ったが、暫くすると痛みが引いてきた。

なぜインストールに痛みを伴う使用にしたのだろうか。

そんなことを考えていると、インストールが終わったらしい。

「インストールが成功したかどうか確かめるから、そのまま通信機を耳に当てておけ」

シードの命令通り通信機に耳をあてて、インストールが成功しているかどうかをシードが確認している間、再度ハート・プログラムの暴走に十分注意するように促された。

「どうやらうまくいったようだな。

人間と接触すればするほど、人間の感情を得ることができる。

観察対象へ積極的に話しかけて、信頼関係を結ぶようにしろ」

シードはそう告げた後、ハート・プログラムの使用報告は後日必ず行うように久美に命令して通信を終わらした。

黒い通信機を耳から離す。最初に得られる感情は何だろうか。

電脳中枢にいろいろ浮かんできたが、考えても仕方がないという考
えにいきついた。

連治：主人公のごとく振舞って失敗する（前書き）

初めての朝投稿

連治：主人公のごとく振舞って失敗する

能天気な姉が出て行った扉を見つめる。

当然問題は解決しない。

さっきまでの少女に対する言動を思い出す。

何だあれば、少年漫画の主人公並みに怒ってたな、俺。

いや、どちらかと言うといいじて主人公に頬を殴られる役かな。代わりかどうかわからないが、ほっぺにキスされたが。馬鹿姉にだけど。

少女の顔を思い返すと、無理やり笑顔を作ろうとしたと思われる奇妙な顔が浮かんできた。

あの子からしたら、初めて新しい家族に会う日だったんだよね。そんなときにいきなりあんな態度されたら傷ついて当然だよな。

姉にはどうせなら殴って欲しかった。

いやそういう性癖はないけど。

視線が褐色のクリップボードに張り付けてある少し色褪せた凜音の写真に目がとまった。

写真の凜音が苦笑いしてくる。彼女に謝れと言っているように感じた。

凜音のことはもう吹っ切れたと思ってたんだけどな。

しかし本当によく似ている。

写真を眺めているうちに凜音の悲しむ顔と先ほどの少女の顔が重なり、知らず知らずのために息が漏れているのに気付く。

凜音がいたら呆れられそうだな。いやあいつは笑って許してくれるか。
現実逃避のためか思考がどんどん脱線していく。
最初は反省していたはずだが、いつの間にか凜音のことで頭がいっぱいになっていった。

突然のメールの着信で思考が遮られ、無意味な時間が流れていったことに気がつく。

とりあえず謝るのが先だな。そういう結論に瞬時に達する。

メールがどうでもいいダイエットグッズの宣伝であることを確認してから体を起こし、隣の部屋へ移動すべくベットから立ち上がる。

とりあえずなんで機嫌が悪くなったかは分かった。

ということ、部屋の扉を開けて廊下へ出る。

少女の部屋の前まで来たので、とりあえず心を落ち着かせるために大きく深呼吸してノックした。

笑顔の練習もすべきかな。

練習している自分の姿を想像してしまい、気持ち悪いと却下の判断を下す。

「はい、どうぞ」

少女の声がしたので、入ってもいいか了承を取った後に、少女の部屋に入る。

凜音がいた部屋に凜音が成長したような少女がいる。
なんか少し違和感を感じる。

しかし今は、まず謝らなければ。それからだ。

「さっきは悪かった。ごめん」

頭を下げながらそう言った後、頭を上げ目を見ながら一呼吸置いて続けた。

「大切な妹がいて、この部屋はそいつが使ってた部屋だったんだ。
4年前、そいつが俺のせいで死んでしまったんだ。

さっきお前がこの部屋使うつて姉ちゃんがいいたとき、その時のこと思い出して、お前は全然悪くないのに八つ当たりしてしまった。悪かった。ごめん」

最後にもう一度頭を下げる。

彼女は何と返答すればいいのかわからなくなったのだろう。全然気にしてませんと言葉を詰まらせながら答えた。

緊張のためかまだ彼女は動きがぎこちない。緊張しすぎるタイプな
んだろう。

これからは家族として支えていかなければいけないな。

家族か。

ほんとに家族になるにはどうすればいいだろうか。
何事もまず形かららしいから、まず呼び方を変えればいいかな。
という訳で提案する。

「久美って呼んでいいか？」

彼女の目が一瞬ピクリと動いた後、コクリと頷いた。
これから心の中でも久美と呼ぶことに決定する。

「私は、どう呼べば」

何かを言いたそうにしている久美を見て、どうしたのかと聞いたところそういう答えが返ってきた。

凜音はお兄ちゃんだったけどさすがにちょっと恥ずかしいな。

唸っていると久美が提案してきた。

「連治さんでどうしょう」

他人行儀過ぎだ。

姑が気に入らない嫁を呼ぶ時に使う表現だ。

もしくは、セレブが、自分の子供を呼ぶときに。車のドアを自分で開けたことがない人達しか使ってはいけない呼び方だろう。

渋っていると、真顔で次の案を提示してきた。

「では、兄さんと」

あまりに真剣に提案してくるので、久美が急にかわいく思えて思わずなでてしまった。

久美はびくつと反応した後、下を向いて困惑しているようで、少し微妙な空気が流れた。

いや訂正しよう。かなり微妙な空気が流れた。

気まずい空間は、覗き癖のある姉がコホンと後ろでわざとらしい咳
ばらいをするまで続くことになってしまった。

撫で続けながらもこの絶体絶命の事態をどう収めようか途方に暮れ
ていたで、ほんの少しだけ感謝することにした。

あくまでもパンダカ・ピグマエアの心臓の大きさ位のほんの少しだ
け。

ちなみパンダカ・ピグマエアは、雄の最大体長が11mmの世界最
小の食用魚だ。

そんな小さいのによく食えるな。まったく関係のない話だが。

連治：主人公のごとく振舞って失敗する（後書き）

2011年 07月 30日

今日初めて評価入れてくれた人がいました。

ありがとうございます。

ちよつとテンション高めで、いつもなら寝ぼけてるのに目が覚めます。

それから、お気に入りユーザにも初めて登録してくれる人がいました。

サックス!!

読んでくれている人もありがとうございます。

これからも、よろしくお願いします。

久美：新たな感情を得る

ターゲットに頭を撫でられ中。

どう反応すれば彼に気に入られるかが分からない。

電脳中枢で現在の状況への対処方法を必死で検索していた。

検出されたのは、テレビドラマのワンシーン。3カ月ほど前に院長と一緒に見ていた月9のドラマ。

頭に乗った男性の手を子供が払いのけているものだった。

ただ、その行動に移すのをやめにした。

そのドラマのその後二人の関係は、良いとは言い難かったから。

他に方法がないものか。

電脳中枢で再び検索開始。

しかし中々見つからない。

そこで、突然、扉の方から咳ばらい。そこで、そちらに視線を移した。

満面の笑みを浮かべた女性が立っているのが観測される。両手で頬を抑えたターゲットの姉が。

慌ててターゲットが頭から手を離したのを感知した。

そのとき、心拍数にわずかだが変化があったことに気づく。

ハート・プログラムの影響が早くも出てきたのかも。

少し驚き、ターゲットに視線を戻す。

「ずっと見てたの？」というターゲットの質問。

彼の姉は彼に答えず、私に言葉をかけてきた。

「まあ、何かあったらいつでも相談に来てね。私たちは、もう家族なんだからね」

その発言後、私たちに近づいて、彼女は、ターゲットと私、二人同時に抱擁してきた。

家族という単語を検出した瞬間に心音の増大。一瞬だった。一瞬だったが感知した。そんな気がした。すぐに消滅したので原因を保留にすることに。

それより何より、今はこの状態を何とかしないと。ターゲットの姉が二人同時に無理やりの抱擁。

そのせいでターゲットがこちら側に倒れ込んでしまっている。彼は車いすに手を置いて、私に体重がかからないように必死にこらえているようだった。

「じゃあ、おやすみなさい」

満足したのかターゲットの姉はそう言って離れていった。ターゲットも姿勢を立て直し、ため息をついてから、お休みと声をかけてきた。

そして、彼は彼の姉に続いて部屋の出口へ向かっていった。

「それから、私のことはお姉さんと呼んでいいわよ」

部屋を出る直前に扉の前で、振り返っての彼女の発言。彼女の笑顔は私が頷くまで微動だにしなかった。少し不思議に思ったが、その後はにやけ顔だった。少し疑問に思ったが、好いてはくれているのだろう。

「何を張り合っているんだか」

ターゲットが彼の姉を追い越しながら、彼女に向かって呟いた。

いやそう呟いているように聞こえただけなのだけれど、理解が不能だったため発言の真意を後でシードに確認すべきだろうかと考えた。

二人が出て行き蟬の鳴き声が急にはっきり聞こえ出す。

家族という言葉聞いたときのことを思い出す。

心臓から放出される血液の急激な流速の上昇。それを感知したことを思ふ。

何度か家族という言葉を呟いてみることにした。

家族と呟くだけでは何も変化が起こらなかった。

次にターゲットとその姉のことを思い浮かべて呟く。

拍動が速まる現象が確認された。

ハート・プログラムで得られた感情だろう。

先ほどインストールしたばかりなんだけれど。

なんという感情だろうか。としばらく考えてみた。

初期から備わっている喜びという感情だろうか。

それとも、幸せという感情が得られたのだろうか。

いくつか候補を上げたが正解は導き出せなかった。いや、どうすれば答えが分かるのかもわからなかった。

電脳中枢で感情について考えていると、ふと、彼らとはいずれ別れなければならぬことを思い出す。

彼らに好意を抱くことの危険性を思い出す。

彼らと一定の距離をとっていなければいけない。

その上、信頼されなければならない。

二つを同時にという無理難題をどうやれば解決できるのか。

アンドロイドの未来。本当の家族と幸福な記録の獲得。

そのためにも何とかしなければと決意した。

連治：バイト代が飛ぶ

寝返ってつも効果のない蒸し暑さと一瞬途切れてもすぐに始まる蝉の騒音で目を覚ます。

壁に視線を向けて、時計の針が7時を指しているのを確認した。

食欲ないがとりあえずキッチンに行くか。そう考えて、ベットから抜け出ることにする。

キッチンに行くと久美と姉が朝食をとっており、二人の食べる香ばしいトーストの匂いで食欲が少しわいてきた。

パンをトースターに突っ込むときにカレンダーが目に入る。

7月30日。

そういえば明日が夏祭りだったことに気づく。

トースターのスイッチを入れ久美に声をかけることにした。

「久美、明日夏祭りに行こうか？」

「ふふふ、連ちゃんやさしいのね。」

久美ちゃん、浴衣持っていないなら、私の昔の浴衣着ていていいわよ。場所あとで教えるわね」

久美が頷いたのを確認すると、にやけ顔の姉が目に入る。

「若いっていいわね」

とりあえずこの発言は無視することを決定して、パンが焼きあがる前に我慢できずに目玉焼きに箸をつけた。

「それとも、やさしい・お・に・い・さ・ん・が可愛い妹に浴衣をプレゼントしてあげる？」

やたらとお兄さんを強調するのは意味があるのだろうか。

久美に視線を移すと、口を開けて何かをしゃべる直前でフリーズしていた。

おそらく、二人の話にどう割り込めばいいのか分からないのだろう。

余りにかわいく感じたので、今月リールを買うのを諦め、浴衣を買うことが脳内会議で決定された。

「じゃあ、バイト代入ったし、これ食べたらいいこうか」

久美にそう伝えようと、姉は自分が提案したにもかかわらず、なぜか急に拗ねだした。

「あら、やっぱり・お・に・い・さ・ん・は妹にはやさしいのね」

今度のお兄さんには、やたらとひがみのようなものが入っていた。突然どうしたんだろう。

姉が不機嫌になるようなことを言っただろうか？

まあ、そのうち機嫌も直るだろう。

いじける姉を無視することにして再度久美に提案したが、久美は姉の方を見て断ってきた。

さらにもう一度尋ねようかと思ったが、このままではちが明かないと判断し、一方的に出発時間を通達することにした。

普段使わない駅のエレベーターでの移動、段差のある場所を避けて遠回り。

予想以上に時間がかかって目的地に着いた。
熱気で充満した外から冷房の利いたデパートに入れて少しほっとする。

金曜日にしては意外と込んでいたな。

とりあえず冷たいジュースでも飲もうか。

そう決めて、休息所と書かれた矢印へと向かった。

「意外と時間がかかったな」

「すいません」

話のきつかけのつもりで切り出した言葉に久美がビクリと反応した。おそらく批判的に感じたのだろう。

そういう意味で言ったわけじゃないとすぐにそう答えたが、久美はしばらく俯いていた。

どうも家族に対して遠慮しすぎてるな。

どうすればいいだろうか。

しばらく考えていると、言葉使いから直していけばいいのでは？と思います。

よし、家族間丁寧語禁止令を発動しよう。

「家族と話すときはもっとフランクに話してよ」

なんかアメリカ人になった気分だ。

自分で言いながら自分の言葉が少し恥ずかしくなった。

他に言い方なかったかなと思っていると、再度久美がうつむいているのが目に入った。

「すいません。あまり慣れてないから。やはり変ですか」

また批判的に感じてしまったらしい。

そんなことないとまた慌てて誤解を解かなければいけなかった。

血のにじむような努力の末、家族は丁寧すぎない方が多少は自然だとうややく分かってくれたらしく、少しずつ変えていこうということになった。

「ありがとうございます」

少しずつ変えていくことになった。なったはずだが、説得が終わるとそう言われた。

おそらくアドバイスありがとうという意味なのだろうか…。いきなりそう言われてじっと見つめた俺は悪くないと思う。

「あつ、ありがとう」

俺の視線を感じて慌てて言い直した久美によろしいと返事をして、
10階の浴衣売り場へ行くことにした。

「いらつしゃいませ」

にこやかな笑顔に営業スマイル。目が獲物を見つけたように輝いて
いたことから、話し好きであることが分かる。彼女のそばにいては
危険だと判断して久美を連れて彼女がいる通路とは別の通路から店
を眺めることにした。

なぜ浴衣は花柄が多いんだろうか。

赤・白・黄色のチュールリップや少女マンガのようにバラの花が咲き
乱れている店内を久美と回る。回ったのだが、ほんとに回るだけで
終わってしまった。

久美は服の買い物自体が未経験なのか。

これはどうかを何度も尋ねたのだが、浴衣をチラッと見ては俯いて、
店員と目を合わすたびに俯いているだけだった。

このままでは何も決まらないので、仕方なく笑顔の貼りついた店員
にお勧めを聞くことにした。

「こちらが売れ筋です」

そう言って持ってきたのは真っ赤なバラの浴衣だった。
ちよつと派手過ぎるかな。おとなしい久美には似合わないと思うん
だけど。

そう思っていると久美がポツンと呟いた。

「情熱、愛情」

その瞬間獲物を捕らえた獣のように獰猛な笑みを浮かべ、わざとらしく大きく頷くと店員が答えてきた。

「花言葉ですよね。そうなんです。

赤いバラの花言葉は、情熱、愛情です。」

そう言っただ後に、どれだけ売れているか、通気性がいい、さつきも
売れた、夜ではそんなに派手に見えない、このくらいがちょうどい
い、よく似合う、等々長い営業トークが開始してしまった。

この店員大丈夫かと思っていると突然爆弾を投下してきた。

「花言葉に、”あなたを愛します”もあるので、彼女さんに贈られ
るならいいと思いますよ」

「いや、妹です」

即座に否定する。

何を言っているんだこの店員は、空気がびみよーになるだろうが。
話を変えるために、近くのマネキンにかかっている別の浴衣が目に入
り、こっちもいいのではないのかと久美に提案する。

「フリージア…。親愛…」

どうも意外と久美は乙女趣味らしく花言葉をいろいろ覚えていることが判明した。

「なんだつたら両方を試着してみます？」

店員が初めてまともなことを言ってきたので、それに賛同する。試着室の前まで付いてきた後、義足のまま着替えるのは狭い更衣室では大変そうだったので、ワンピースの上からそのまま羽織つたらと提案した。

「こちらから試着いたしますか？」

店員がそう言つて久美にフリージアの浴衣を渡す。

それを持つて更衣室に入る久美に店員が帯を結ぶのを手伝おうかと声をかけたのだが、なぜか一人で着替えたいらしく断っていたのを見て、久美は意外と頑固なのかなと思っていた。

しばらくして更衣室から出てきた久美は、帯がむちゃくちゃだった。それも含めてかわいかったが。

とりあえず明日祭りに行くときは、帯くらいきれいに結んでやりたいな。

「似合つてるよ」

何か気の利いた事を言おうと思ったのだが、そんな当たり障りのないことしか出てこなかった。

なんていえば喜ぶのか、姉に聞いておいた方が良かったかな？

なんか珍しく少し機嫌が悪かったので、聞けなかったのだが。

「次は、赤いバラの方も試着してみますか？」

店員の言葉で考え事を中断される。

そうだなと思って久美を見ると首を振っていた。

「いいです。これがいいです」

どうも俺と久美の間に情熱は存在しないらしい。

なんか振られた気分だが、これから家族として好きになっていくんだから、親愛のフリージアで問題ないはずだ。愛と情熱の赤いバラではなく。

多少残念な気もするが・・・。

肉食系の店員は浴衣を買うことに満足したのか、丈が長さを久美に会わせてもらっている間、営業トークをやめて自分のことを話した。

初めての浴衣の夏祭りやら、浴衣で行った彼氏との海、そういえば去年私も妹から初バイト代でプレゼントをもらった等々止まらなかった。

ちょっと疲れてきたので、しゃべり続ける店員の話聞き流すことにする。

初バイト代でプレゼントか。

そういえば今年からネパール料理屋でバイトを始めたけど、バイト代で一度も姉にプレゼントを贈ったことなかったな。

姉が不機嫌だった理由が分かった気がしたので、解決策としてレジ前に並べてあったフリージアの巾着袋も一緒に買うことにした。

連治：バイト代が飛ぶ（後書き）

2011年 07月 31日

誤字改変：チューリップ 赤いバラ
すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3067v/>

起動したてのアンドロイドver.2

2011年10月9日13時29分発行